

菊池短歌会

1月詠草

遠き日の野辺に七草摘みしよとひとりいただ
く今日の白粥 梅野かをり
月満ちて雲のさざ波光るさま冬の天空宴げのご
とし 北島たき
氣負ふもの無く迎へたる元朝を万両の朱実の
紅が輝く 黒田衣子
微かにぞ水道の水漏れてをるメーターの針静
かに回る 古賀勝士
したたかに老いて手放すトラクター臆面もな
く手を振るわれは 竹野美智代
玲瓏と天に隈なき鞍岳の冠雪仰ぐ心清しく
中川愛子
ももの葉にはや光りつつ消えいそぐ潔きかな
南国の雪 中原ちえ子
かなしみもうれしきもいま大歳の夜渡る満月の
光賜はらむ 村上さき江
八十八年のはるか齢給はりて初御光を身に
浴びて佇つ 山下菊代
再びは帰国するなき妹かただ黙し聴くニュー
イヤークンサート 山代静子

万句の里俳句会

1月句会

賀状書く暮しの一句添へもして 岩木敬治
鴨の群近よりがたき遠さかな 野中公枝
晩学に尽きざる聞志明けの春 隈部輝子
侘助や満開にしてなほ寂し 田島房子
百歳を目指す母在り初御空 加藤妙子
雪装ひ皆霊峰のごときかな 北村妙子
天日の驕りて淋し寒桜 平山邦子
身構へて得意札待つ歌留多取 宮本雅子
カーテンを開けてとびこむ雪景色 林 まつ子
大雪の寺の静寂を深めをり 富田幸子
初雀大地を蹴って飛び立てり 松永久子
風花と言ひ初雪と思ひけり 鋤本トミ

肥後狂句桜会

1月例会

ああら雪 えらいすびくと思うたら 上村玲子
そろそろ 裁判員も板につき 田尻港風
振り返れば 皆あかんべえしとる部下 光堀善教
振り返れば 施設の母がまだ涙 藤野清子
ずるずる とうと籍には入れんまま 小川繁美

あの世で返す積りじゃろ 狩野本六
ずるずる 鎧だろか業だろか 高倉新米
妙な世の中 人が一番恐ろしか 高木房恵
ばれちゃった 孫に見られた摘み食い 辻 弘喜
気になる 未来も四季のあるだろか 窪田明德
満足です 身の丈でなら暮らさるる 田中孝幸
逆らえぬ 姑さんがやかましい 田中レイ子

泗水短歌会

1月詠草

野の原に七草粥の草を摘む忘れかけゆく時も
どさんと 矢野悦子
病なく明けたる年の寒厳し枝垂るる梅につぼ
み見えたり 高藤タツノ
抜け落ちぬ想い濡らしつつ歳晩を遺影とわか
つ三度目のそば 長尾はるみ
久し振り降り積もりたる雪の道一直線にタイ
ヤ痕走る 中山定子
お祓いの頭上を渡る幣の音心身共に清められ
たり 平嶋さくえ
大晦日やうやくお節を作り終ふ如何なる年が
我を待ちるむ 大島さと
年の瀬も老いは氣ばかり何もせず空にはぼつ
かり冬の月照る 増田久美子

せせらぎ俳句会

1月例会

初春の瀬音涼しき町川に子鴨ら浮かび翡翠は
しる 吉安永子
暖冬の今日はうらら日庭先の南天もみじの朱
実華やぐ 福原美智子

七城短歌会

1月詠草

温泉宿 夫婦だろうか手繋いで 続 義昭
家庭円満 足のやり場のにヤア炬燵 中島五女
家庭円満 ちつとほむるとよかごたる 宮上美由
年始客 こっちが年始行こごたる 御手洗三代
年始客 長尻下げておいでよる 山隈好茶

旭志文芸俳句会

1月詠草

この釘に今年も吊るすカレンダー八十二才の
幸せこめて 岩崎照代
恙なく元朝迎え玄関に日の丸揚ぐる清しき中に
松岡みちえ
時雨来て山は雪かよ里の葬 芹川蓉子
洪柿の蒂のみ残し冬ざるる 中尾ヨシコ
息白しペダル漕ぐ少年真っしぐら 芹川のり子
土に手を触れぬひと日や雪ぼたる 水谷ミネ
山茶花の満開新居の道しるべ 東 芳子

肥後狂句水笑会

1月例会

年始客 ヘルパーさんの来らすだけ 神尾迫水
年始客 見知らぬ人もまじつとる 吉岡三水
初仕事 晴れ着気にしてはかどらん 柏原乗仏
ほろ酔い機嫌 どてらは肩にひっかつぎ 井手水光

七城短歌会

1月詠草

廃家なる庭に咲きいる山茶花の淋しくあらむ
横通りいて 高木 精
朝窓のカーテン繰れば目を張りぬ夫に呼びか
く銀世界なるを 池田カツ子
青春の思い出語り合ひし療友阿蘇より案ずる
便りが届く 木下陽子
ふわふわと桜花のごとく降る雪に日が差しと
どき煌きたつる 吉間充子
新年を事なく迎え君が代を唄うも涙あふるる
集い 水田紗陽子
放映の除夜の鐘の音その余韻炬燵にありてし
みじみ聞くも 佐々重弘
伊勢丹で若き日買ひにしワンピース補正はウ
エストマイナス五寸 森 道子
この歳も親に届けむ除夜の鐘時計を見つ一つ
番に突く 村上幾雄

